

私の読書体験

国語科

皆さんも一度は経験があるだろう。「テスト前日に限って部屋の掃除がしたくなる」私も学生の頃からそうだった。明日大事な定期試験なのに、どうも部屋の散らかりが気になる。普段は絶対そんなこと気にしないのに、なぜかとても気になって勉強がはかどらない。結局二時間かけて、これでもかと言わんばかりの気合の入った掃除をしてしまう。そして時間は夜中の一時。「少し仮眠してからがんばろう」と朝の四時に目覚ましをかけるが起きられるわけもなく、テストは散々な結果に…。こんなことばかりしていたので、昔から学校の成績はそれほど良いほうではなかった。それなのに小学校の頃から教師に憧れを抱いていて、その結果、二年の浪人生活を送ることになった。しかしその時も「悪い癖」は治ってなく（今も…）、私の場合、本を読んだ。

浪人生活一年目。〆の予備校に通うことにした。そこでの専らの息抜きは、本屋通いであった。もともとあまり本を読むほうではなかったが、〆よりもはるかに大きくて広い本屋に感動し、意味もなく店内を練り歩いていた。そんな時に会ったのが、ミヒヤエル・エンデの『モモ』（岩波書店）。時間と格闘していたその頃の自分にとって、いろいろ考えさせてくれる書物だった。ほかには、太宰治の『人間失格』（新潮文庫）や、ダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』（早川書房）なども読んだ。わざわざ〆の察にまで入って一浪すれば、さすがに成績は上がった。が、受験した大学すべて落ちた。

二年目。〆に行くことになった。設備会社を経営している叔父の事務所に寝泊りさせてもらい、日中は穴を掘ったり水道工事をしたり、当時O-157が流行したせいもあって、ビルの貯水槽の清掃などもしていた。それが終わってから予備校に通っていた。仕事が長引くと着替える時間がなくて、作業服のまま現役生だらけの教室で講義を受けるという時もあった。事務所に帰って泥のついたシャーペンを見ると、情けないやら悔しいやら…。こういう辛い生活を潤してくれたのが、やはり本だった。〆の本屋にも相当驚いたが、〆の紀伊國屋書店に初めて行った時は、迷子になるんじゃないかと本気で思った。その書店でセンター試験前日（！）に買ったのが、梨木香歩著『裏庭』（新潮文庫）である。これは主人公「テルミ」が不思議な「裏庭」の世界へ入っていく話で、「心の傷」がテーマになっている。その時の自分とオーバーラップさせながら、むさぼるように読んだ記憶がある。同著『西の魔女が死んだ』（小学館）や、向山貴彦著『童話物語』（幻冬舎文庫）なども思い出深い。そして三月。こんなことをしながらも何とか大学に合格することができ、その後もずっとこのような読書のしかたが続き、今に至るのである。

私はいろいろな場面で本と出会ってきた。本を読むことで今までどれだけ心が救われたことか。本との出会いは不思議なもので、その時の自分に必要な本をおのずと手に取るのである。たった一冊の本がその後の自分の人生に大きな影響を与えることもあるのだから、それはもう運命の出会いとしか言いようがない。皆さんも何か悩みや苦しみがあつたら、ぜひ本屋や図書館へ出かけてみよう。きっといい出会いをすることだろう。

